



かんすい

日本水環境学会関西支部ニュースレター

No. 6 (2002年9月1日発行)

— 編集・発行 —
日本水環境学会関西支部
— 連絡先 —
大阪市天王寺区東上町8-34
大阪市立環境科学研究所 芳倉太郎
Tel: 06-6771-3187 Fax: 06-6772-0676

市民シンポジウム

『水辺のルネッサンス～循環型社会における水辺の価値と役割～』報告

水辺環境再生の主体であるNGO、地域コミュニティと学会の連携に期待

兵庫県立健康環境科学研究所 センター 古武家善成

支部主催の上記市民シンポジウムが、支部第3回研究発表会・総会に併せ、2001年11月30日(金)に大阪工業大学創立60周年記念館で、80名以上の参加者を集めて開催されました。支部シンポジウムも4回目となる今回は、支部の部会の一つである川部会活動の成果をベースに、市民生活に安らぎを与える親水空間としてみます重要になっている、都市の水辺環境の価値や役割について取り上げ、講演とパネルディスカッションの2部で構成しました。

講演の部では、大阪産業大学人間環境学部教授で川部会の部会長でもある村岡浩爾先生と、和歌山大学システム工学部助教授の神吉紀世子先生が、それぞれ、シンポジウムのテーマの背景となる概念や調査事例について話されました。

村岡先生からは、「水循環と水辺の価値」と題する講演で、水辺に対して多くの人が関心を示すようになった背景として、河川法改正に象徴されるように、治水、利水を最優先課題としてきた戦後の河川行政自体が、河川環境の保全・整備へと軸足を変えつつある点が指摘されました。そして、「循環型社会形成推進基本法(2000)」の「健全な水循環」の概念に関連付けて、「循環型社会になくなくてはならない水空間」としての水辺は、自然の中に生きてきた日本人の水への親しみが個人から地域へと広がった空間であり、それゆえに、日本の水環境NGOが小さい規模であることも是認されること、しかし、循環型社会のキーワードである「参画」と「協働」を実現するためには、NGO同士のコミュニケーションが必要であること、が述べられました。また、神吉先生からは、「原風景ヒアリングから環境再生目標像をさぐる - 西淀川・貝塚での調査から - 」と題する講演で、都市の自然は、人間の活動の影響があって成立する「文化景域」(ドイツで発達した概念)であることから、それを保全するためには、人と自然との影響関係の維持・再生が重要であることが指摘されました。そのためには、住民の生活と一体となった地域の原風景を把握する必要があり、その手法であるヒアリング調査を、大阪市の西淀川と貝塚の近木川流域で適用した事例が紹介されました。講演からは、都市における河川の水辺の再生が、単純な自然回帰では終わらないことが示唆されました。

パネルディスカッションは、上記の方以外に、摂南大学工学部の澤井健二先生、貝塚市立自然遊学館学芸員の白木江都子氏、環境NGO「川の会・名張」事務局長の川上 聡氏が加わり、タツタ環境分析センターの土永恒彌氏と筆者の司会で行われました(当初パネリストとして予定されていたNGO「近畿水の塾」の土谷朋子氏は、ご都合により欠席されました)。

1970年代までのわが国では、都市における河川などの水辺環境は、水質汚濁や効率優先の土木工法により極めて劣悪な状態でした。しかし、90年代に入り、汚濁の改善や近自然工法の導入などにより、親水性を高めた水辺空間が構成されつつあります。パネルディスカッションでは、このような歴史的経緯を踏まえ、多自然型や地域に密着した川づくり、処理下水の循環利用、住民参加・環境教育などを切り口に、現在の親水空間の問題点や、21世紀の循環型社会が求める水辺環境のあり方を検討することを意図しました。パネリストの皆さんには、まず、都市の水辺環境に対する現状の問題点を示していただき、それから、循環型社会にふさわしい再生法や生態学から見た望ましい川づくり、再生主体の問題や住民参加を保証する方法について議論しました。「現状認識」では、「都市の水収支ははずんでおり、この悲観的状况を施策者が認識する必要がある」(村岡)、「水は汚れていても遊び空間としては使われており、この体験は重要」(神吉)、「生活が便利になりすぎて、水辺への関心が薄れてきた」(澤井)、「三面張りされずに残った貝塚の近木川がBODワースト1になり、何が出来るのかを強く意識した」(白木)、「川は、連続した水系としての捉え方が重要。多自然型川づくりなどおこがましく、せいぜい近自然型だ」(川上)などの意見が出されました。「水辺環境の再生とその主体」の問題では、これまでの川づくりにおいて技術を提供してきた河川工学やその研究者の責任が俎上にのり、研究者の役割について議論が交わされました。また、「再生」の場への住民参加の重要性が確認されました。会場からの発言も相次ぎ、現場の生態系を考慮しない今の多自然型川づくりへの批判、川づくりにおける行政への注文、逆に、行政への幻想から脱却してNGO自身の自立を求める意見など、白熱した議論が続きました。(2面に続く)

(1面より続き)これらの議論を踏まえ、“都市の水辺空間に対する将来像”に対しては、「遊びを含んだ流域の交流・情報交換が必要」(川上)「水をつないで人を生かすことをしたい」(白木)「分野間、年代間の連携が必要で、その橋渡しをしたい」(澤井)「『自然に学び人に聞く』と言う立場で、説得力ある情報を地域のコミュニティーから得ることが重要」(神吉)との意見が述べられ、村岡先生からは、「循環型社会では生活環境からの視点が重要であり、水辺空間の再生やその持続においても、その力はNGOやコミュニティーから出てくる。これらの主体が行政をサポートすることが必要」とのまとめが出されました。

支部市民シンポジウムでは、2000年9月の第3回において、水環境問題解決のために学会とNGOとの連携の強化が必要との認識が合意されました。本シンポジウムでも、都市の水辺環境再生の主体としてNGOが指摘され、それをサポートする研究者(学会)の役割も浮き彫りにされました。このように、水環境分野におけるNGO活動の重要性および学会との関わりは、ますます強く意識されるようになっていきます。支部では、市民に開かれた学会活動をめざして様々な試みが始まっていますが、会員の皆様のご協力が不可欠です。今後の活動への積極的な参加をよろしくお願いいたします。

寄稿 「土壌汚染対策法」に乗る

大阪産業大学人間環境学部 村岡 浩爾

「土壌汚染対策法」が国会で承認され、平成15年1月1日の施行に向けて現在関連事項が整備されている。この法律は大気の「大気汚染防止法」、水の「水質汚濁防止法」の制定から30年余遅れをとってスタートすることになる。水や空気と同様、もう一つの基本的な環境媒体でありながら土の法整備が遅れたのはなぜか。

第一に、水や空気の汚染が一過性であるのに対し、土はストック性の汚染という汚染形態上のれっきとした違いがあったからである。水の場合、健康保全と生活基盤の確保から望ましい目標として環境基準を決め、その状態に向けて汚染させないように排出などを規制できた。土は土壌環境基準に鑑み、もうこれからは汚すなど言うことはできるが、汚れてしまった土壌をどうするんだという問題が残る。すなわち、汚染土壌を費用がかかっても何とかクリーンにするとか人体および周辺環境に対し影響のない状態にしない限り、環境基準を決めた意味がない。「対策基準」と言われる所以である。従って汚染の状態を知る調査、および汚染土壌の然るべき措置に関する技術の対応が遅れていたのである。

第二に、土地には値段がついていることである。また経済成長期、数々の化学物質が使われ、過失、故意を問わずそれらが土壌に蓄積してしまっていて、「過去の負債」といわれる汚染した土地があちこちに存在することになった。しかし、汚染した土壌を環境基準に照らしてなんらかの措置を取る場合の(調査・措置費用を含めての)責任の所在、行政指導の在り方、支援体制の在り方等に対する考え方がこれまで未整備であったのである。まして汚染に係わった土地が今後どう売買されどう利用されていくか、その結果地域経済にどんな影響が及んでいくかは今でも予測が不明瞭である。

とは言え、この時期に最後の大物環境である土の汚染対策法が動き出すのは意義深いことである。長い目で見れば、国土の保全と経済の安定化および発展を両立させる最も重要な法整備であろう。しかしながら、私自身はもう一つの方向を見極める必要があると思っている。それは土壌汚染が地下水汚染と連結していることで、市街地においては遅い地下水でも一年に数mは汚染物質を動かす移動性があると見ておいた方がよい。そのような地下水特性を考えると、特に市街地において、地下水が水循環系で係わる役割、地盤沈下沈静化に伴う地下水位上昇、非常時の水源としての利用といった面と、土壌汚染から地下水汚染へのラインとの関係を我が関西支部でも取り上げていく必要がある。つまり、この際「土壌汚染対策法」に大いに乗っていくべきだと考えている。

内分泌攪乱化学物質部会 環境ホルモン問題への世論が低下した今こそ腰を落ち着けて活動を

兵庫県立健康環境科学研究所 古武家善成

「かんすい 5」でご案内の通り、内分泌攪乱化学物質問題に関する一般向け書籍「環境ホルモンの基礎と最前線 - 水環境を中心にして -」の出版計画が進行中です。当初は、今年の5月頃の刊行(技報堂出版)を予定していたのですが、原稿の遅れで予定もずれてきています。しかし、原稿執筆と平行して入稿原稿の校正を進めていますので、刊行時期の大幅な遅れは何とか防げると考えています。執筆陣には、当部会員以外に、東京理科大学武田先生、国立環境研究所遠山先生、神戸女学院大学川合先生、熊本県立大学有園先生、北九州環境科学研究所門上先生、千葉大学森先生、大阪大学藤田先生、京都大学松井先生、同森澤先生など、この分野の第一線の研究者を配しています。刊行をご期待下さい。

眼を国内に転じますと、環境ホルモン問題に対する世間の動きは鎮静化しつつあります。ある機会があったので、このような世論の動向を把握するために、朝日新聞のデータベースで「環境ホルモン」がキーワードとなる記事を検索しました。すると、1998年初めより記事数が急激に増加し、その年の8月には140件/月ものニュースが飛び交ったことがわかりました。その後は徐々に減少し、最近では20~30件/月程度で推移しています。このグラフをみて、日本人の“熱しやすく冷めやすい性格”を目の当たりにしたように思いました。しかし、世論は沈静化してもこの問題の重要性はいささかも減少していません。今こそ、じっくり腰を落ち着けてこの問題に対処すべきと思いますが、皆様の考えはいかがでしょうか。

日本水環境学会関西支部主催見学会の御案内

琵琶湖・淀川の治水および水環境保全のために国土交通省、滋賀県等ではさまざまな取り組みを行っています。今回はその取り組みの現場をみていただくための見学会を企画しました。皆様のご参加をお待ちしております。

【期日】2002年10月11日(金) 9:50~17:00 【集合場所】JR大津駅改札出口付近(9:50)

【日程】10:00 大津駅前 出発(貸切バス) 10:30 南郷洗堰、水のめぐみ館アクア琵琶(琵琶湖治水の歴史展示) 11:40~12:40 昼食(石山寺にて各自で) 13:00 滋賀県立水環境科学館(琵琶湖水質関連の展示) 13:30 湖南中部浄化センター(超高度下水処理場) 14:30 ヨシ栽培センター(植栽用ヨシ苗の栽培施設) 15:30 降雨時汚濁負荷削減対策施設(貯留池建設現場:守山市守山川河口) 16:20 農業系汚濁負荷削減対策施設(浄化池建設現場:草津市志那中内湖) 17:00 草津駅 解散(交通状況により多少変更することがあります) 【参加費用】3000円

【申込先】肥田嘉文(滋賀県立大学環境科学部 TEL:0749-28-8306 FAX:0749-28-8477 E-mail:yhida@ses.usp.ac.jp)

【内容問合せ】大久保卓也(滋賀県琵琶湖研究所 TEL:077-526-4335 4800 E-mail:okubo@lbri.go.jp)

【申込締切】2002年10月4日(金) E-mailまたはFaxにてお申し込みください。申し込みの際には、参加する方の氏名、所属、連絡先(住所、電話番号、FAX番号、E-mailアドレスなど)をご記入ください。定員は45名で先着順です。

かんさい“水”めぐり

灘の銘酒の命『宮水』について

西宮神社(西宮のえべっさん)の東南の一角、久保町、石在町あたりは世に有名な宮水地帯である。初夏のある日、機会を得て訪れてみた。宮水は灘の銘酒の命の水であり、環境省名水百選にも選ばれている。宮水の名前の由来は『西宮の水』からきているが、知らない人が意外に多い。いまさら言うまでもないが、硬度8~9でリン、カリウム、カルシウムが多く、鉄分は極めて少なく塩分を適度に含み、酒造りに最適な水質である。戎、法安寺、札場筋の三つの伏流水が当地帯において混じわり、絶妙なバランスで成り立って

神戸市環境保健研究所 高原 信幸

る。海岸に近く浅い宮水井戸は(4~5m)海水面の変動や大型土木工事などの影響を受けやすく、宮水保存調査会はその保存にかなりの努力を要していると聞く。宮水発祥の地の記念碑とその近くの宮水庭園をめぐりながら、あらためて現代において灘の生一本を飲めることに感謝をし、帰途についた。なお、写真は神戸市水道局の矢野洋氏の提供である。余談であるが、阪神・淡路大震災の影響をうけなかったため、水道が使用不能の時に解放され、付近の人たちにたいへん喜ばれたそうである。



宮水庭園(宮水井戸とはね釣瓶)



宮水発祥の地の記念碑

川部会 楽しく都市の水辺環境のあるべき姿を、模索し、構築する

大阪人間科学大学 福永 勲

川部会の活動報告を一言で、言い表すと表題のようになります。当面行ってきた、および今後予定している活動を報告して、関西支部会員の皆様方の積極的なご参加を呼びかけます。

1. 現地調査活動 近木川(貝塚市)2001年9月 庄下川(尼崎市)2001年11月24日 生駒山麓諸河川・長瀬川・東横堀道頓堀川(大阪府)2002年3月31日 鴨川(京都市)2002年5月18日 有馬川(神戸市)2002年7月6日
2. 学会発表 水環境学会関西支部の市民シンポジウムにおいて「水辺環境のルネッサンスー循環型社会における水辺の価値と役割」(2001年11月30日、大阪工業大学)と題して、都市の水辺環境のあるべき姿を6人の先生、市民の方々にディスカッションしていただいた。(シンポ詳細はトップ記事) 「環境技術研究協会研究発表会」(2002年6月14日)では、上記の現地調査活動を通じて得られた結果をまとめ、5つの表題で発表した。来年2003年3月開催の世界水フォーラムに積極的に参加する。世界の大都市では、水辺環境をどのような視点で捉えているか、国際アンケートによって把握解析しようと活動している。
3. 出版活動「歩きながら読める水辺の本」をキャッチフレーズとして、2003年の早期に庄下川、近木川、東横堀・道頓堀川を主題とした気軽な水辺環境の本を出版しようと、準備している。その後、第2段として鴨川等も主題としたものも目指している。

支部総会・市民シンポジウム「水環境を学ぶ 京都の水環境、その変遷と未来」の御案内

日本水環境学会関西支部総会、および支部主催市民シンポジウムを下記要領で開催します。多数の参加を期待します。

【期日】2002年12月13日(金)

【場所】キャンパスプラザ京都 第3講義室 (JR京都駅北側徒歩1分)

【日程】12:20:受付開始 / 12:30~13:00:支部総会 / 13:10~13:15:開催挨拶 支部長 大阪人間科学大学 福永勲 / シンポジウム開始・13:15~13:55:京都府保健環境研究所 上田彬博:「京都府の河川水質とその変遷」 / 13:55~14:35:京都清華大学 板倉豊:「鴨川の生き物ウオッチング」 / 14:45~15:25:大阪産業大学 寺島泰:「都の生活と水利用の変遷」 / 15:25~16:05:京都府保健環境研究所 筒井剛毅:「ナホトカ号事故とその後」 / 16:10~17:10:「全講師と参加者による総合討論 京都の水環境の未来」 / 17:30~19:30:支部懇親会 会費 実費(5,000円程度)

【シンポジウム参加費】無料

【参加申込】2002年11月30日までにFaxまたはE-mailにて、所属、氏名、懇親会参加の有無、連絡先(住所、電話番号、FAX番号、E-mailアドレス)を下記までお知らせ下さい。先着順で定員(160名)に達し次第締め切らせていただきます。

【申込・問合せ先】米田稔(〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学工学研究科環境地球工学専攻 TEL:075-753-5154 FAX:075-753-5066 E-mail:yoneda@risk.env.kyoto-u.ac.jp)

2002年度関西支部役員名簿

顧問:合田 健	元京都大学	宇野 源太	元大阪工業大学
名誉理事:河合 章	元近畿大学	川島 晋	元大阪工業大学
北川 睦夫	活性炭技術研究会	北村 弘行	元兵庫県立健康環境科学センター
駒井 豊	元大阪府立大学教授	佐谷戸安好	元摂南大学
園 欣弥	元兵庫県立工業技術センター	永井 迪夫	元大阪府環境情報センター
支部長・理事:福永 勲	大阪人間科学大学	副支部長・理事:中室 克彦	摂南大学
理事:天野 耕二	立命館大学	大畑 雅洋	和歌山県立衛生公害研究センター
井上 頼輝	福井工業大学	今井 俊介	奈良県保健環境研究センター
奥野 年秀	(財)ひょうご環境創造協会	川村 隆	兵庫県立健康環境科学研究所
川合真一郎	神戸女学院大学	國松 孝男	滋賀県立大学
菅原 正孝	大阪産業大学人間環境学部	中澤 秀夫	大阪市立環境科学研究所
土永 恒彌	(株)タツタ環境分析センター	津野 洋	京都大学
中島 淳	立命館大学	中村 正久	滋賀県琵琶湖研究所
東 国茂	(株)産業技術総合研究所	平田 健正	和歌山大学
前田 知穂	京都府保健環境研究所	松井 三郎	京都大学
盛岡 通	大阪大学	森澤 眞輔	京都大学
山田 淳	立命館大学	山中 芳夫	大阪学院大学
渡辺 功	大阪府立公衆衛生研究所		
監事:塩山 昌彦	(株)クボタ		
幹事長:芳倉 太郎	大阪市立環境科学研究所	飯田 博	(財)関西環境管理技術センター
幹事:天野 耕二	立命館大学	上田 彬博	京都府保健環境研究所
池 道彦	大阪大学	大久保卓也	滋賀県琵琶湖研究所
海老瀬潜一	摂南大学	貫上 佳則	大阪市立大学
門口 敬子	(財)関西環境管理技術センター	澤井 正和	(株)川崎重工業
古武家善成	兵庫県立健康環境科学研究所	中島 元生	(財)ひょうご環境創造協会
高原 信幸	神戸市環境保健研究所	中村 秀人	(株)日水コン
中野 武	兵庫県立健康環境科学研究所	森 一英	(株)クリアス
肥田 嘉文	滋賀県立大学	山林 右二	東大阪市公害監視センター
山田 春美	京都大学	米田 稔	京都大学
山本 耕司	大阪市立環境科学研究所		
		井伊 博行	和歌山大学
		上野 仁	摂南大学
		笠原 伸介	大阪工業大学
		紀本 岳志	(株)環境理化学研究所
		笠 文彦	龍谷大学
		中野 一郎	(株)クボタ
		服部 幸和	大阪府環境情報センター
		矢野 洋	神戸市水道局水質試験所
		山村 優	寝屋川南部広域下水道組合

日本水環境学会関西支部ホームページのご案内

水環境学会関西支部のホームページを開設しています。昨年度の支部活動の内容や報告等をご覧いただけます。今年度の関西支部活動の学術講演会、市民シンポジウム、見学会、総会、ニュースレター等の案内や、支部部会活動等をご覧いただけるように準備をしています。日本水環境学会のホームページ(<http://www.jswe.or.jp/>)の中に関西支部活動としてご覧いただけます。また、インターネット検索項目で「日本水環境学会関西支部」からもアクセスできますのでぜひご覧下さい。

現在のホームページのコンテンツは、(1)関西支部主催研究発表会、(2)講演会、講習会、市民シンポジウム、環境情報ネットワーク講演会、(3)見学会、(4)支部ニュースレター、(5)研究部会活動(川部会、内分泌攪乱化学物質部会、環境文化部会)、(6)編集部会活動等です。